

保育者養成における表現指導のあり方を考える

—初年次教育の観点から—

Thoughts on how to guide future childcare teachers to express themselves openly:
Think from the perspective of first year education

橘 和代(有明教育芸術短期大学)

松田 扶美子(有明教育芸術短期大学)

Kazuyo TACHIBANA (ARIAKE College of Education and the Arts)

Fumiko MATSUDA (ARIAKE College of Education and the Arts)

(キーワード)

保育者養成、表現、アイスブレイキング、羞恥心、初年次教育

1. はじめに

筆者が所属する短期大学は、保育者および教育者を輩出する養成校として様々な表現活動を取り入れている。中でも絵本の読み聞かせ、ピアノ伴奏、ピアノ弾き歌い、手遊び、歌などの「表現実技」は、保育・幼児教育者をめざす学生にとって必修の学習である。また、これらすべての活動は人前での行為であるため、技術の習得および達成度に加えて羞恥心(恥かしさ)の有無も教育者をめざすうえで乗り越えなければならない課題である。しかし、教育者をめざしている学生の性格や学習していく過程において、強い羞恥心が引き金となって将来の選択肢を狭めてしまうことも考えられる。自身の感情を無理に抑制してパフォーマンスを行ったとしても、対象者への影響も懸念されるであろう。よって、保育・幼児教育者をめざす学生の「表現実技」における羞恥心を除去あるいは軽減させる必要があると考える。

2. 学生の羞恥心に関する研究

これまで筆者らは、身体表現活動における羞恥心の要因の検討(2016, 杉浦, 橘)を行うため、身体表現時において羞恥心を感じる要因の検討に有効な質問紙項目の選択を行ってきた。F県在住の青年学生223名を対象に行った質問紙法の結果、身

体表現活動における「恥ずかしさ」の理由として過半数の者が選択した項目は「経験の少なさ」

(57.5%)であった。続いて比率の高かった項目は「自身への注目」(44.3%)、「性格の問題」、「自信のなさ」であった。つまり羞恥心の有無や程度には、過去の経験や自信、周囲からの評価などが大きく影響している可能性が表出した。

これらの結果をもとに、保育・教育実習における学生の「恥ずかしさ」の実態、特に「経験値」や「注目」および「評価」に着目し学生の意識調査を行った(2018, 橘)。実習で行う保育内容の頻度が高い「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「うた(アカペラ)」「絵本読み聞かせ」「手遊び」の5つを取り上げ「表現実技」と定義した。結果、「うた(アカペラ)」が一番恥かしく「絵本読み聞かせ」が一番恥かしくないであった。また、恥かしさの要因として「注目」と「評価」を選択する学生が過半数であった。「恥かしさを克服する方法として、練習して他人にほめてもらいその経験を積み重ねていくことで自信になり、“恥しい”という感情から“見てほしい”に変わる」という記述があった。取り組みの繰り返しで自信をつけることで「恥かしさ」が「誇り」に転換するという心理的作用が読み取れる。また、何かのきっかけ

があれば自己の判断で羞恥心を忘れて自己表現できるか、の設問において7割近くが「できる」または「できるときもある」と答えていることから、自由記述で挙げられた「恥かしさを克服する方法」や「何かのきっかけ」が学生指導上のキーワードとなりうるのではないだろうか。よって「一人では恥かしいが複数で行えると恥かしさが小さくなっていく」という心理効果も併用して実際の指導法に役立てていくことは可能であると考えた。

3. 授業「うたと手遊び」

筆者が現在担当する科目、保育教材「うたと手遊び」は、1年次に設置されている

音楽専門の講師と保育専門の講師が共に知恵を絞り合い、初年次教育を念頭に入れた教授内容になっている。様々なアクティブラーニング法（アイスブレイキング、二人で、そして全員で、楽しく、歌、群読、みんなで息をあわせるなど）を実践的に取り入れている。年々効果が出始めており、学生アンケートの満足度はかなり高く、自由記述では前向き思考の記述が顕著に読み取れる。羞恥心に関する心理学的な面からのアプローチとして、アイスブレイキングを活用している。

(1) 体を意識する（アイスブレイキング）

まずはストレッチから。自身の身体と感情を意識しながら行う（二人から数人で）。

(2) 呼吸を感じる

寝ている状態をイメージし、それぞれ1分間目を閉じ、リラックスタイムを作る。その後、仰向けになり体中の力を抜く。睡眠時には腹式呼吸である為、その状態に近づけ腹式呼吸を促す。まず体中の息を吐き出す、吐き出すことにより、より素早く深く呼吸ができる。手の先まで息が通っているか、足の先まで息が通っているか声をかけ、息を感じながら呼吸を行う。

(3) 「声」に着目する

自分の声を聴くのは恥ずかしい、と多くの人が感じている。まずは自然な状態、日常使う言葉を

出していく。仰向けになったまま、天井に向かって「オーイ」と声を出す。目的は大好きな人をイメージし呼ぶことである。「声を出す」のではなく「呼ぶ」に置き換えることでより自然に声を出すことができる。そののち、だれが一番長く声を出せるか時間を計る。計ることにより、ほかの人との違いや自身の身体と声の状態を認識することができる。

(4) 群読をする

前述の報告にある、「一人では恥かしいが、複数で行えると恥かしさが小さくなっていく」という心理効果をうまく利用して群読を行う。萩原朔太郎の「竹」を使用し伸びやかに発声する。言葉を暗記して竹をイメージし、声を出していく。竹がグングン伸びていく様子をイメージしていくと声がグングン上にあがっていく。情景をイメージすることと声を合わせることにより、一人では味わう事の出来ない声を出すことの気持ちよさを体感できるようになる。

(5) 手遊び・わらべうたの習得

実習へ行くことをイメージして、たくさんの手遊びや、わらべうたを習得することを意識づける。

(6) 保育現場における事例からイメージする

音楽専門（声楽）の講師が言う「清潔な声」を体感しつつ、保育実践の具体的な事例をわかりやすく伝えることで、初年次の学生でもイメージしやすい。学びへの動機付けや学習スキルの習得を念頭に入れてすすめることで、一人一人の学びと集団での学びあい「価値観」の多様性を見出し、総合的な自己発信力や自己表現力の向上に繋がることをねらいとする。

4. 参考文献

- ・杉浦宏季, 橋和代, ”身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選択“福井工業大学研究紀要, VOL45, (2015), PP264-267
- ・橋和代”保育・教育実習において学生が自己評価する表現実技における羞恥心の実態”有明教育芸術短期大学紀要, VOL10, (2019), PP31-42